

## その 11

### 上総国の蜂娘子<sup>をとめ</sup>

#### 「末の珠名」



上総の末の珠名娘子(たまなのをとめ)を詠む一首

「しなが鳥 安房に継ぎたる 梓弓 末の珠名(たまな)は 胸別(むなわけ)の 広き我妹(わぎも) 腰細  
の すがる娘子(をとめ)の その姿(かほ)の きらぎらしきに 花のごと 笑みて立てれば 玉ほこの 道  
ゆく人は おのが行く 道は行かずて 呼ばなくに 門に至りぬ さし並ぶ 隣の君は たちまちに 己妻  
(おのづま)離(か)れて 乞(こ)はなくに 鍵さへ奉(まつ)る 人皆の かく惑(まと)へれば うちしなひ  
寄りてぞ妹(いも)は たはれてありける」

(安房の国に続いている周准の珠名娘子は、豊かな乳房の可愛いひと。すがる蜂のように腰の細い娘が、その美しい顔で花のように頬笑んで立っていると、道を行く人は自分の行先を棄て、呼びもしないのに娘の家の門まで来てしまう。隣の家のご主人は前以て自分の妻と離縁して頼みもしないのに鍵まで渡す。皆が皆これほど血迷うものだから娘の方も品を作って靡き男遊びに耽っているのだったよ)

高橋虫麻呂(巻9・1738)

「金門(かなど)にし 人の来立てば 夜中にも 身はたな知らず 出(い)でてそあひける」

(門口に 人が来て立つと 真夜中でも わが身は顧みず 出て逢ったという)

高橋虫麻呂(巻9・1739)

上総国の末、というと現在の千葉県富津市辺り、そこの美女珠名を詠んだ長歌は、とりわけ夢か現か幻か、誠にユニークである。そもそも、この歌の主人公「すがる娘子(をとめ)」とは何者か? 「すがる」とは、人の情にすがる? いや、男にすがる娘? …いや逆に、男がすがりつくほどの娘子? …そのいずれも間違い。「すがる」とは蜂、「すがる蜂」と呼ばれる地蜂のことで、すがる蜂のような娘という意である。では、すがる蜂のような娘子、とはどのような娘か? 冒頭の写真を見てほしい。蜂のように胸が大きく豊か、胴がくびれてキュー

と締め、顔はキラキラ輝き、花のような笑顔…まるで、セクシースターとしてデビューしたマリリン・モンロー（ちょっと古いか？）、そのものである。その名は「珠名」。そして、そもそも蜂は……人を刺す、時にはその一刺しで人の命を奪うこともある。蜂のような美しい肢体をしているだけではない、蜂がゆえに男を刺すとは、なんとも妖しく奔放な「すがる娘子」ではないか。虫麻呂は、その名前のように虫や昆虫に詳しく、珠名に「すがる娘子」という絶妙なあだ名を付けたのだろうか、見事な命名である。

ところで、この時代の美人とは一体どのような女性だったのだろうか。世界史上の三大美女の1人にも列せられ、日本美人の代表とされる小野小町が、果してどのような容姿だったのか、当時の絵や記録はないので知るべくもない。しかし、一般的には古風な日本美人の特徴は、大きなふっくらした顔に切れ長の目とおちよぼ口、きめ細かい色白の肌に華奢ななで肩、とされているから、胸が大きく胴が細いという珠名はかなり型破りだ。そう言えば、710年頃できたとされる奈良明日香村の高松塚古墳壁画の女子群像を見ると、特に美人図ということではないが、確かに「大きなふっくらした顔に切れ長の目とおちよぼ口」という部分はその通りである。しかしながら、この歌を知るまで胸が大きく胴がくびれた女性に、万葉時代の男たちが夢中になったとは思ってもよらなかった。だが、虫麻呂は、間違いなく、「すがる娘子」を美人としているわけだから、それが唯一記録された奈良時代の美人像の定義であり、現代の方が思い違いをしていた、と言うべきだろう。何人かの万葉学者も、「万葉の時代に、こんなに淫奔な美女ぶりを詠って、生き生きとした現代感覚の描写があるのか」等と絶賛しているように、古も今も同じだったのである。万葉集を愛する詩人の大岡信氏は「日本の詩歌の歴史において、もちろん画期的なものであり、その後もまず類例をみない」と断言している。もしかしたら、高松塚の女子たちも、豪華な衣の下に、「すがる蜂」のような肉体派の肢体が隠されているのかもしれない。

「すがる娘子」のように妖しい魅力で男を誘いついには身ぐるみはがす現代の悪女というと、松本清張の『黒革の手帖』の原口元子が思い起こされる。銀行の支店に勤務する地味なOLだった元子は、その地位を利用して銀行から大金を横領、それを元手に、銀座のクラブのママとなり、男たちを手玉にとっては成り上がっていく。男たちは、この魅惑的な「すがる蜂」に引き寄せられその針に刺されて身を滅ぼしていく。これまで何回となくテレビドラマ化され、錚々たる女優が原口元子役を演じて話題となったが、それぞれの悪女振りが痛快で魅力的だった。まさに、現代の珠名である。

美しいだけでなく、男たちを手玉（手珠か？）に取る悪女と知りながら、その魅力に引きずり込まれてしまう男心、何度となく女の針に刺されても懲りることなく、また会いに出かける男心は、今も昔も変わらないようだ。そんな男心を詠って、なんとも怪しく、魅力的な歌ではないか。世に知られるはずもなかった珠名が、万葉集に収められたことにより、後世の人々の注目を集めることになったのである。

その注目の集め方もまた異色である。あろうことか、悪女珠名が「姫」と称えられ神さまに祀り上げられるのである。「珠名姫神社」である。まさか、珠名さまが神さまになるとは、お釈迦さまでも、いや虫麻呂さまでもござんじあるまい。万葉ファンタジスタ虫麻呂が、もし現代に蘇って、この珠名姫神社にお参りしたら、その思いはいかばかりだろう。



珠名姫神社  
建て替わって現在はない  
(君津地方歴史情報館 HP から)

ところで、真間の手児奈を思い出してほしい。この珠名と手児奈という、肉体的にも心情的にも対照的な2人の娘、それも下総と上総という、今は同じ千葉県内にいた2人の美女の物語を、虫麻呂はそれぞれ長歌と反歌に詠んだ。そして、それぞれの歌の中に、符合する表現がある。「花のごと 笑みて立てれば」と「身をたな知る」である。前者は、セットのようにまったく同じ文言である。一方、後者は、「身をたな知らず」男に靡き戯れた珠名と、「身をたな知りて」男を断ち入水した手児奈、「身をたな知る」という同じ表現を使いながら、真反対の2人の娘を詠んでいる。

それから考えると、虫麻呂は、この2つの歌を対比的に対して詠んだのではないだろうか。或いは、1人の女人の中に相反する2つの性情があることを見てとり、それを手児奈と珠名という2つの女性像に分離して、2つの歌に詠んだのではないか。としたら、この2つの歌は、1つ1つの歌として成立すると同時に、2つの歌をもって完結するセットの歌である、と仮定するのもあながち間違いではないだろう。虫麻呂は、2人の女に二股をかけたと評した所以である。

昔話から、日本人の意識構造を研究しているある心理学者は、日本人が抱く女性像は、2つに分離していると分析している。浦島太郎の伝承に出てくる「亀姫」を例に、1つは、亀姫に化身した女性で、女の方から男にプロポーズして、捕らえた男を次々飲み込み、男は悲劇的な結末を迎えるタイプ。もう1つは、亀姫が亀と姫に分離、すなわち、肉と心が乖離することで、姫は乙姫になり、乙姫は、肉体性を否定し男を結婚

の対象にしないタイプ、つまり、亀姫型と乙姫型という 2 つのタイプの女性像に分類している。手児奈と珠名の伝説は、その研究の対象に入っていないが、とすると、虫麻呂は、その 2 つの女性像を歌にしたわけで、現代の心理学者の分析を先取りしていると言えなくもない。

この 2 つの女性像を、別役実ならずとも当世風に言えば、1 のタイプは、「控え目で従順」なタイプ。もう 1 つが、「自分の考えを持ち積極的」なタイプだろう。前者は、言うまでもなく手児奈タイプ、後者は珠名タイプで、手児奈は何人かが歌に詠んだのに対し、珠名は、虫麻呂 1 人しか取り上げなかったところを見ても、古来男たちは手児奈タイプの「わかまえる」女性を好み求めてきたようだ。

それが露呈したのが、最近の東京オリンピック・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長の「女性蔑視発言」とその対応にあたふたする周りの男たちただだろう。古から今に至るまで女性に対する男たちの愚かさは変わることはないようだ……と、ここまで書いてきたところで、「森喜朗会長辞任」という速報が流れた。続投の意向だったが国内外の反発が広がり、辞任に追い込まれた。その決め手となったのが、IOC バッハ会長などの五輪会議に欠席の意向を表明した東京都知事では、と解説されている。とすると、現代の珠名は、さしずめ……？

閑話休題……改めて『黒革の手帖』である。松本清張のこの人気小説は、面白いことに週刊誌の『禁忌の連歌』シリーズ（1976～80 年）に連載されたものである。つまり、「連歌」……手児奈の歌と珠名の歌は、それと同じ「連歌」、文字通り、歌として連なっているのではないか。

そこで、虫麻呂ナウ、この 2 つの歌がセットであるならば、2 つの歌を 1 つの物語に組み立ててみたらどうだろう。もしかしたら、それが虫麻呂のねらいにより近づくことになるのかもしれない。ついては、前回の手児奈の歌と今回の珠名の歌を組み合わせ、ファンタジックな万葉劇に改題してみることにしよう。できるだけ大胆に改編するが、そのタイトルも大胆に、謎解き「手児奈と珠名」……手児奈はなぜ自死したか？そして、珠名はなぜ悪女になったか？その仮説を、次回、「万葉ファンタジア」として紹介する。

虫麻呂は万葉学者や大岡信氏が言う通り、珠名は、「画期的」で「現代的」、ナウいのである。「生き生きとして淫奔な美女」珠名は、現代で言えば「悪女」である。そんな悪女を、前述したように、後世の人々はお姫さまとして、ましてや神として祀ったのである。心理学者の分析に倣って言えば、珠名を亀姫と考えると、亀と姫に分離して、その姫の方を祀ったと言えるかもしれない。いずれにしても、これもまた「画期的」である。「珠名姫神社」は、富津市にある 5 世紀から 7 世紀にかけての古墳群の 1 つ、前方後円墳の内裏塚古墳の後円部墳頂にあったという。ちなみに前方後円墳は、日本に約 4700 基確認されているが、最も多く分布するのは千葉県の 733 基、次いで茨城県の 455 基。長い歴史を誇る畿内の方が、は



るかに多いだろうと思い込んでいたが、奈良県で 312 基、世界遺産に登録された「百舌鳥・古市古墳群」がある大阪府の 202 基に比べても、千葉県は突出して多い。

「珠名姫神社」は、大正 4 年近くの飯野神社に合祀されて今はないが、そこには今も嘉永 4（1852）年に建てられた「珠名塚」の碑が残っている。バス通りからすぐ後円墳に上る細道の頭頂の木陰に、その石碑はひっそり立っていた。思ったより小柄なその石碑は、手玉に取られた男が腹いせに割ったような跡を（？）補修したのだろう、男が珠名に「すがり」つき抱きつき「口吸ひ」を迫っているようにも見えて、かえって生々しく妖艶、いかにも「すがる娘子」珠名に相応しい、「画期的」な造形となっている。異色の歌人、虫麻呂が詠んだ珠名は、神となり石碑となった今もなお艶めかしく異色を貫いている。虫麻呂が現世に蘇って、この石碑を見たら、また新しい物語を語り詠い上げてくれるのではないだろうか？

次回の「万葉ファンタジア」で、それに挑戦する。



珠名塚碑

「珠名塚碑(ちょうひ)」と彫られている  
(君津地方歴史情報館HPから)

#### 【追記】

「珠名塚碑」等がある君津市や富津市から 10 キロ余りのところに、JR 馬来田駅があるが、その一帯は、「万葉碑の里」と呼ばれている。馬来田駅を起点に、上総国の東歌や防人の歌を中心に、人麻呂や家持、旅人、憶良などの万葉歌碑 10 基が建立され人々の絶好の散策路になっている。案内の HP は次の通り。

URL: [万葉碑の里 \(umakuta.com\)](http://umakuta.com)